

科目区分：人文・社会科学科目

授業科目名	言語と芸術（16世紀末～17世紀初めの日本語の世界）				学期	曜日	校時
英語名	Language and Art (Japanese Language in 16-17C)						
担当 教員名	川口 敦子	単位数	2単位	必修 選択	選択	後期	水曜日 4校時
授業のねらい・内容・方法							
<p>16世紀末～17世紀初めというのは、日本語が、古語から現代語へと大きく変化していった時期に当たる。この授業では、当時の話し言葉について扱うが、特に話し言葉にはほとんど現代語のような一面も見られ、江戸以前＝古典、というイメージを覆してくれることだろう。</p> <p>この授業では、資料を読解することによって、そこに書かれている内容を正確に把握し、日本語の古語と現代語のつながりを理解することを目標とする。そして、現代語を含む日本語全般への興味と理解を深めて欲しい。狂言は日本が誇る伝統芸能であり、キリシタン版は長崎に縁の深い貴重な資料なので、資料への理解も深めてもらいたい。</p>							
テキスト、教材等							
講義中にプリントを配付する。参考書は講義内で適宜紹介する。							
対象学生	成績評価の方法				教員研究室		
全学部	試験の成績に、授業への参加状況を加味して、総合的に判断する。出席状況によっては失格とすることがある。						
授業計画							
<p>第1回：ガイダンス 16世紀末～17世紀初めの日本語の話し言葉の資料である「狂言」と「キリシタン版」を紹介する。</p> <p>第2回：狂言について</p> <p>第3～8回：狂言台本のことば 狂言をビデオ鑑賞し、台本を読みながら、室町末期～江戸初期の日本語がどのようなものであったのかを理解する。 また、擬音語・擬態語など、狂言独特の言葉の使われ方にも着目する。</p> <p>第9回：キリシタン版について</p> <p>第10～14回：キリシタン版のことば 天草版「平家物語」や「イソボ物語」、ロドリゲス「日本大文典」などのキリシタン版を見て、当時の日本語の語彙や音韻、方言などについて考える。 また、ヨーロッパ語を日本語に翻訳する際に生じる問題についても取り上げたい。</p> <p>第15回：まとめ</p> <p>受講生の人数や構成によっては、順序や回数を多少変更することがあるので、了承されたい。</p> <p>オフィスアワー（質問受付時間）</p> <p>随時。ただし、教員研究室に来室しての質問は、事前にメール等でアポイントメントを取ってください。 e-mail：atsukok@net.nagasaki-u.ac.jp 電話：095-819-2301</p>							